

医療経営学 第2版 病院倒産時代を生き抜く知恵と戦略

今村知明, 康永秀生, 井出博生 著

＜書評者＞ 信友浩一（福岡市医師会成人病センター病院長）

わが国に医療経営学を持ち込み、研修を始めたのは GHQ であり、日本人自らが時代の要請から医療経営学を学び教育・研修を始めたのではない。それは昭和 24 年（厚生省病院管理研修所発足）のことであった。

その点でわが国の病院経営管理は米国の病院管理の導入から始まったといえるが、わが国特有の医療風土を踏まえた病院管理の展開は石原信吾先生（研修所はその後国立医療・病院管理研究所に、退職時には同研究所経営管理部長）に負うところ大であり、その実績は『石原信吾論文選集：夢なきところ、民は亡ぶ』（1990 年）に詳しい。

そして半世紀である。若い日本人が誰から頼まれたわけでもなく、日本の医療風土を直視したうえで学術的な裏付けを持った医療経営の理論体系化に挑戦したのである。従来の医療提供体制・保険制度を大前提にした収支改善対策の指南書（ミクロ経営）としてのテキストではなく、マクロ経営の基本方針とその変革をも前提にした全体最適の医療経営を図る経営書となっている。理想形を追求するという健全な野心がはぐくん

える。

このような経営学の書であるからであろう。本書は 5 年後の今年、第 2 版が出版された。健全で健康な、という形容詞を冠した医学書の紹介があったかどうか承知しない。だが、健全な野心が生んだ経営学の書として、多数の医療経営学テキストが出版される中で本書に注目していた。第 2 版の新機軸は、医の原点に立ち返り、豊かさを実感できる社会装置としての医療経営を改めて体系化する、ということであった。その中から抽出できた二大方針は、①競合する相手との生存競争に打ち勝って己だけが生き残ることを目指すべきではないことと、②医療に必然のリスクを医療提供者と患者・市民とで共有すること、と明記された。これが健全な野心と私がいうゆえんである。ところが、誰が本書の副題として「病院倒産時代を生き抜く知恵と戦略」としたのだろうか!? まるで施設完結型医療の時代の方針を表してはいないだろうか。著者らの方針が地域完結型医療であるにもかかわらず、である。

もう 1 つの本書の魅力は、新たな論点を設定し独自に解説を加えている第四部「日本の医療の論点」

である。第一章「医療と社会のコンフリクト」では医師と患者のコミュニケーション・ギャップやメディアによる医療関連報道と不確実性に対する無理解などを取り上げている。ただ、対話に至る新たな挑戦までは言及されていない。第二章では「医師不足と医師のキャリア・パス」が取り上げられており、当然のように①医師の偏在と不足、②医師補助職、③医師の処遇、④医局と医師、に問題を設定し、論点を網羅できている。第三章「手術件数と手術成績の関連」では系統的な文献レビューが不足し物足りない論議になっているのが惜しまれる。情報公開により患者の受療行動や病院経営にどのような影響がみられたか、などが知りたいところである。最後の第四章は「医療の規制緩和」、医療機器の内外価格差、混合診療、株式会社による病院経営が取り上げられている。医療経営のステーク・ホルダー別に各論点をどのようにみているかの対照表があれば、対話のある医療界へと踏み出せる第一歩になるのではないかと期待しながら読了したところである。

最後になるが、本書は寝転んで読める経営学の書である。著者たちは想定していないだろうか。

●A5 頁 272 2011 年
定価 3,990 円
(本体 3,800 円 + 税 5%)
[ISBN978-4-260-01200-3]
医学書院 刊